内村鑑三と『安心決定鈔』

鈴木範久
suzuki noribisa

内村鑑三と仏教

内村鑑三は近代日本の生んだ傑出した思想家であり、無教会キリスト教の唱道者としても知られる人物である。その日本のキリスト教における新運動が、清沢満之の精神主義運動にも少なからぬ影響を与えたことは、雑誌『精神界』の発行に先立ち、清沢門下の三羽烏、暁烏敏、佐々木月樵、多田鼎の内村訪問によっても明らかである。

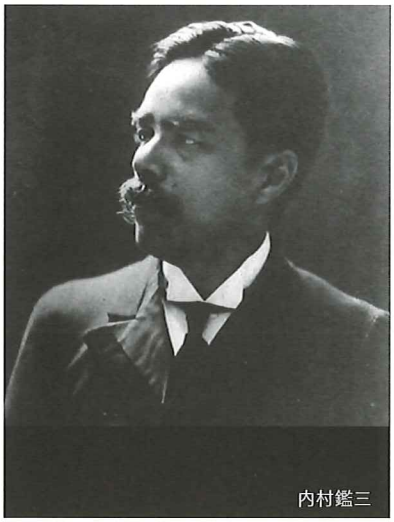
その内村も『代表的日本人』のもととなった*Japan and the Japanese*（『日本及び日本人』一八九四年）を著述していたころは、同書で法然や親鸞による民衆仏教登場にふれているものの、大きな関心は日蓮にあった。「代表的日本人」として描く五人のうち最後に、しかも最大の紙数をさいて描いた人物は日蓮であり、あわせて雑誌『国民之友』でも「日蓮上人を論ず」を連載した（一八九四年九～十月）。

法然・親鸞への関心

ところが、内村の一生とその全著作を俯瞰すると、一九一五（大正四）年ころから、法然、親鸞への関心と言及とが急に増え始める。たとえば『聖書之研究』一八〇号（一九一五年七月十日）において「我が信仰の友　源信と法然と親鸞」と題した小文を掲げ、こう述べる。

我が信仰の友は惟り独逸のルーテルに限らない、英国のウェスレーに止まらない、米国のムーディーを以て尽きない、我国の源信僧都、法然上人、親鸞上人も亦我が善き信仰の友である。

と記し、法然に関しては「一枚起請文」、親鸞に関しては蓮如の「御文」の言葉が引用されている。北海道大学に収められている内村の遺した蔵書を見ると、『法然上人全集』（黒田真洞、望月信亨共纂、再版、宗粋社、一九〇八年）、蓮如の『御文章』（岡本偉業館、再刊、一九〇八年）などが所蔵されているから、これらを参考にしたものだろう。


内村鑑三

ついで、翌月の同誌一八一号の「米国流の基督教」においては、シカゴのキリスト教大会の演題に「如何にして商売に成功せん乎」とあったと聞き、「米国流の基督教」よりも「余輩は寧ろ法然又は親鸞流の仏教たらんことを欲す」と書いている。同号には本沢清三郎の「『我が信仰の友』を読む」も収められ、本沢は、寺院主義に反対した法然であるから、もしもキリスト者なら無教会主義をとったであろうと述べている。本沢は岡山出身で同郷の法然にひかれた読者であった。同じ八月十日、岡山県津山に住む森本慶三あての手紙で内村は「法然房を以て福音的仏教を産出せし作州の地が福音的基督教の根拠の地たらんことを祈り候」と期待している。のちに内村は、津山の森本により設立された基督教図書館の開館式に出席、帰途には近くの誕生寺駅で下車し法然の誕生寺に立ち寄っている。

同年九月の『聖書之研究』一八二号には「我が信仰の祖先」と題して次のように記している。

日本にも大なる信仰家が在つた、法然の如き親鸞の如き正さに其人であつた。彼等が仏教徒であつたのは、彼等の時代に仏教を除いて他に宗教がなかつた故である。

このあとに「本願を信せんには他の善も要にあらず…」との『歎異鈔』の言葉を続けている。

では、この時期、なぜ内村は日蓮に代わって法然、親鸞の思想にひかれたのであろうか。内村の人生をかえりみると、この時期に内村

には個人的、社会的に二つの大きな出来事があった。個人的には三年前の一九一二（明治四五）年一月、一七歳の娘ルツの死去である。くわしい状況は省略するが、この体験は内村に来世の存在を確証させた。社会的には前年の一九一四年六月に世界大戦が始まり、文明の末路の認識を深めている。内村の思想上「現世離れ」の要件は充分に存在していた。しかし、そうかと言って決して現世逃避ではなかった。小冊子ながら名著『デンマルク国の話』を一九一三年に刊行もして、それは副題にあるように「信仰と樹木とを以て国を救ひし話」であった。

『安心決定鈔』に感動

その内村が、右に紹介した「我が信仰の祖先」のなかで、法然の『撰択集』、親鸞の『歎異鈔』とならんであげている書物が『安心決定鈔』である。著者は覚如と言う説もあるが現在のところ明らかでない。本書は一九一五年（大正四）八月十三日、夏休みを過ごすために日光の禅智院に向かう途中の車内で読まれた。やはり北海道大学の内村文庫には一冊の『安心決定鈔』が収められている。それによると本書は寛政三（一七九一）年の宮田喜左衛門の書写本にもとづき石川清龍により明治三十（一八九七）年に作成されたものである。同じ刊本は極めて少ないが、内容を見ると、たとえば明治二一年に澤田友五郎により刊行された『安心決定鈔　全』と比較してもほぼ同一である。

内村旧蔵本の『安心決定鈔』を見ると最後のページの余白に「A great book of faith. Read with great impression on the evening of Aug.13,1915,on the way of Nikko. K.U.」との書き入れがみられる。すなわち「偉大なる信仰書」で一九一五年八月十三日夕、日光に向かう車中において大いに感動して読了したと記入されている。加えて「頼ませて頼まれ玉ふアミダブツ」とあり、その横に「エペソ書」の文字も記されている。前者は蓮如のものと伝えられる歌の上の句であり、後者は新約聖書のパウロ書簡とされる一書で、特に第二章八節にある「汝らは恩恵により、信仰によりて救はれたり、是おのれに由るにあらず、神の賜物なり」を指したのではなかろうか。いわゆる「機法一体」であろう。

このため、同年七月十日の「我が信仰の友」ではまだ源信、法然、親鸞の名に止まるのに対して、九月十日の「我が信仰の祖先」では『撰択集』、『歎異鈔』とならんで『安心決定鈔』が加えられている。

『安心決定鈔』への書き込み

内村旧蔵本の『安心決定鈔』は、日光までの車中でおおかた読了されたとみられる。そのときの感想がかなり強かったためだろう。前述した最後のページのほかにも、全体にわたり少なからぬ書き込みや線引きがみられる。その部分のなかから書き込みを中心としていくつかを示すと次の通りである（本文の句読点は現代文のように整理し、漢字は新字体に改めた）。

まず「仏は衆生にかはりて、願と行とを円満してわれらが往生をすでにしたゝめたまふなり」の「すでに」に圏点、あとは傍線を付している。ここの「仏」のところに内村はキリストをあてて読んだと思われる。

次の「仏の正覚なりしと、われらが往生の成就せしとは同時なり」に傍線、上部空欄に「Rom.IV,25」と書き込み。すなわち新約聖書ロマ書四章二五節には「主は我らの罪のために付され、我らの義とせられん為に甦へらせられ給へるなり」と記されている。阿弥陀仏の正覚がそのまますべての人の往生と同じであることに、内村はイエスの十字架の出来事がすべての人の救済とみるパウロの思想を見いだしている。

「仏は正覚なりたまへるか、いまだなりたまはざるかを分別すべし。凡夫の往生をうべきか、うべからざるかを、うたがふべからず」の上欄に「True Faith」と書き込み。人間側の努力、心配の不要をみたものであろう。

ついで、『般舟讃』の言葉として書かれた

「おほきにすべからく慚愧すべし」の言葉に圏点を付している。罪の懺悔に対する共感と受け取られ、つづく「慚愧」の二字を四角に囲っている。

「弥陀は兆載永劫のあひだ、無善の凡夫にかはりて願行をはけまし」に傍線、つづく釈尊の「八千返」にも傍線を付している。内村は、キリストの十字架も「無善の凡夫にかはりて」とみているから、続く「行は仏体にはげみて、功を無善のわれらにゆづりて」に圏点を付し上欄に「Vicarius sacrifice」との書き込み。この英語はキリストによる身代わりの死を意味する。

「自力の成じがたきことをきくとき他力の易行も信ぜられ、聖道の難行をきくに浄土の修しやすきことも信ぜらるゝなり」に傍線を付し上欄に「Law and gospel」と書き込み。すなわち「律法」と「福音」の関係との類似をみている。

「願行は菩薩のところにはげみて、感果はわれらがところに成ず。世間出世の因果のことはりに超異せり」に傍線を付し上欄に「Love's Miracle」の書き込み。続いて仏は「正覚を成じ、凡夫は往生せしなり」および「われらが往生、すでに成ぜりと言ふことを」にも傍線。キリストの十字架の死を受け入れるだけでよいとの思想にもとづき、阿弥陀仏とキリストによる救済に共に「愛の奇蹟」を見出している。右の文につづき「御名をきくも本願より成じてきく。一向に他力なり」の文の上欄に「Through faith; and not by yourself」との書き込み、自力でなく信仰を読み取っている。

「三悪の火坑にしづむべき身なるを、願も行も仏体より成じて機法一体の正覚成じたまひけることのうれしさよとおもふとき」につづく「歓喜のあまり、おどりあがるほどにうれしきなり」に傍線、上欄に「Acme of joy」すなわち「歓喜の極致」との書き込み。

「弥陀大悲のむねのうちに、かの常没の衆生みちみちたるゆへに」に傍線し上欄に「Whole humanity in the head of Amida」と直訳にひとしい書き込み。

阿弥陀仏の「大願」、「無智のわれらがためにかはりて」の一連の記事のページ上欄に「Lamb slain from the foundation of the world.」との書き込み。やはり世のいけにえとなった仔羊であるキリストを重ねている。

「修因感化の道理にこへたる別異の弘願なるゆへに、仏の大願業力をもて凡夫の往生はしたため成じたまひけることのかたじけなさよと」と二ページにまたがる文の前後を短い二本の線で区切り、前のページには「Imputation of merits」、後のページには「Remarkable!」とそれぞれ上欄に書き込み。メリット（功業）に対する超越に感嘆している。

「五百の長者の子は臨終に仏名をとなへたりしかども往生せざりしやうに、臨終にこゑにいだすとも帰命の信心おこらざらんものは人天に生ずべしと」とある上欄に「This is common sense, Not namuamidabutzu, but true faith」との書き込み。南無阿弥陀仏と唱えることではなく、信心が肝心であるところに共鳴している。

このようにみてくると、内村はみずからの自伝『余はいかにしてキリスト信徒となりしか』（*How I became a Christian.*）でみたアメリカのキリスト教と、その影響下に成立した日本の教派的キリスト教よりも、むしろ法然、親鸞、「安心決定鈔」の仏教に強い共感と真実を見いだしている。特に、阿弥陀仏の願いと結果にキリストの贖罪とほとんど変わりない内容を読み取っている。同書に記されたいくつかの書き込みから判明するように、パウロのキリスト観と信仰観との同一性である。

内村においては、この「安心決定鈔」との出会いは、三年後の一九一八年に口火を切る再臨運動、さらに六年後の一九二一年に開始されたロマ書の連続大講演にも通じるように思われる。

（すずき　のりひさ・宗教史学者、立教大学名誉教授）
著書に『内村鑑三の人と思想』岩波書店